

# ガヴリール・ポポーフ、 あるソビエト 作曲家の肖像

文・高久 暁 Satoru Takaku (音楽学・音楽評論)

## Gavriil Nikolayevich Popov

ガヴリール・ポポーフ。名前を知るひともいるだろう。しかし今日、作品の実演を聞く機会はまず存在しない。

ポポーフは1904年8月30日(新暦9月12日)、ドン・コサックの首都で知られたロシア南部の町ノヴォチェルカスクの知識階級の家庭に生まれた。6歳のとき母親から音楽の手ほどきを受け、続いて近郊の都市ロストフ・ナ・ドヌでピアノを学んだ。15歳で母を失い、17歳のとき父親が誤認逮捕された。ポポーフは地元の大学の理工系学部に進学、オペラ劇場で伴奏者として働いた。現在残されている最初期の曲はこの時期に作られている。

1922年、ポポーフはペトログラード(当時のサンクトペテルブルク)音楽院に入学、総合技術専門学校にも籍を置いて建築を学んだ。音楽院には2歳年下のショスタコーヴィチが在学、生涯の盟友となった。多くの音楽経験を共有した二人は、最も将来性豊かな才能の持ち主として注目された。

ポポーフの「生の声」を知るうえで第一級の資料となるのが、生涯にわたって書かれた日記である。1925年5月1日付の日記から抜粋しよう。「昨日、ストラヴィンスキー《ペトルーシュカからの3つの楽章》とヒンデミット《組曲1922年》の楽譜を買った…2月に作曲した《表現》<sup>エクスプレッシャ</sup>はぼくの進歩の新たな一歩だ…ストラヴィンスキー、シェーンベルク、ヒンデミット、プロコフィエフ<sup>スター</sup>これがぼくの星たちだ」

面識のなかったシェーンベルクに献呈されたピアノ曲《表現》は「作品1」として出版された。ハーモニクス奏法が用いられ、不協和音を直観的に連ねたパッセージがクライマックスを築く無調の小曲だ。シェーンベルク《3つのピアノ曲》作品11からの影響が濃い。

1927年はブレイクスルーの年だった。《七重奏曲》作品2と《大ピアノ組曲》作品6を完成、二作とも翌年出版された。《交響曲第1番》の構想も始まった。

作曲の師シチェルバチョフに献呈された

《七重奏曲(のちに室内交響曲に改題)》は、シェーンベルクを除くポポーフの「星たち」から触発された、屈託のない身振りの澁刺とした響きが魅力的だ。当時のソビエトで最先端の音楽の推進役を務めた音楽学者アサフィエフは、この作品に自身が理想としたダイナミックな形式感覚と自由な旋律の展開を聞いた。《大ピアノ組曲》では線的なピアノリズムが徹底的に追求されている。

ポポーフは9年ぶりに帰郷したプロコフィエフと知りあった。当時のプロコフィエフはディアギレフ率いるロシア・バレエ団と共同作業の最中で、ディアギレフは《鋼鉄の歩み》に続くソビエトもののバレエを祖国の新進作曲家の音楽で制作したいと考えていた。プロコフィエフからショスタコーヴィチとポポーフの作品を紹介されたディアギレフが、熟考の末に選んだのはポポーフだった。その計画は1929年夏のディアギレフの死で途絶した。1930年以降、ポポーフは生活のためにプロレタリア演劇の付随音楽や映画音楽の作曲を手掛けていった。ワシリエフ兄弟監督の映画『チャパーエフ』(1934年公開)でポポーフの映画音楽の作曲は練達の頂点を迎えた。

しかし1935年3月、《交響曲第1番》の初演がすべてを暗転させた。ポポーフの日記には次の交響曲の作曲プランが記されている。「頭の中ではっきりと鳴り響」いていたその交響曲は、「公衆の月並な音楽的趣味を引き裂き、熱狂的な力と情熱を轟かせる」はずだった。それはついに書かれることがなかった。

大粛清の時代だった。オペラ《ムツェンス

ク郡のマクベス夫人》を「音楽のかわりの荒唐無稽」と非難されたショスタコーヴィチが、1937年11月の《交響曲第5番》の初演で「名誉回復」を果たしたころには、ポポーフの覇気はすっかり失われていた。初演を聞いたポポーフは、居合わせた作曲家シャポーリンの夫人に話した。「ぼくは臆病者になりました。ぼくは臆病者で、何もかもが怖い」 1939年に独ソ不可侵条約が締結されると、ポポーフは友人に「これで少なくとも5年間は戦争がないだろう。オペラを作曲できる」と語った。あまりに楽観的だった。当時ポポーフが作曲中だったスペイン内戦を扱った映画は政策的見地から制作が中止され、スタニスラフスキー・ネミロヴィッチ＝ダンチェンコ劇場委嘱のオペラ《アレクサンドル・ネフスキー》は未完に終わった。

それでもポポーフは戦時の高揚のなかで状況に適応していった。映画監督フリードリヒ・エルムレル(著名な指揮者の父親)が1943年に制作した映画『彼女は祖国を防衛する』の音楽に基づく《交響曲第2番》作品39は、古典的な形式感を備えて完成度が高く、1945年制作の映画『転回点』の音楽には《交響曲第1番》に近い野心的な表現も聞くことができる。1946年、《交響曲第2番》はスターリン賞を受賞、ポポーフは弦楽合奏のための《交響曲第3番「英雄的」》を完成させてショスタコーヴィチに献呈した。翌年にはソビエト功労芸術家の称号を得た。

しかし、1948年のジダーノフ批判でポポーフは「形式主義者」の烙印を押された。

ガヴリイル・ポポーフ、  
あるソビエト作曲家の肖像

ただちにポポーフは交響曲第4番《祖国の栄光》作品47(実質は独唱とアカペラ混声合唱のためのカンタータ)を作曲したが、《森の歌》のような評価のV字回復は得られなかった。ポポーフは愛国的な歌詞による合唱曲を次々に作曲、1958年によく部分的な名誉回復が果たされた。

ポポーフは117の作品を残した。作品番号は102まで確認され、映画音楽は38作を数える。1960年以降も交響曲第5番《田園》作品77や第6番《祝日》作品99を筆頭に、各分野に仕上がりの良い作品を残したが、往時の勢いを取り戻すことはなかった。

ポポーフが交響曲をショスタコーヴィチに献呈した以上、「返礼」がなければ作曲家としての信義に反すると言うべきだ。それは恐らく1953年初演の《交響曲第10番》の冒頭でなされた。この交響曲の公開リハーサルも初演も聞いたポポーフは、冒頭部分を自作の引用として聞いた。同年12月25日の日記を抜粋しよう。

「第1楽章導入部の主題は…私の《大ピアノ組曲》から取られている…第2小節2拍目[裏]の八分音符の経過音[ミb]がないが、それも不思議なことに動機が繰り返されるうちに聞こえてくる…ミーチャ [ショスタコーヴィチの愛称]はこの組曲を良く知っていた…自分がこの組曲を[演奏して]有名にしようとまで言ったのだ…」

ポポーフの組曲の第1曲《インヴェンション》の主題とショスタコーヴィチの交響曲第10番第1楽章の冒頭部分、そしてショスタコーヴィチのイニシャル音型として名高い「DSCH」を譜例に掲げた。ショスタコー

ヴィチがいつ、何をきっかけにこのイニシャル音型を着想したかは知られていない。あるときショスタコーヴィチは気づいただろう。友人のピアノ曲の主題の音を入れ替えると、自分のイニシャルになると。そして交響曲の後半で音型を活用する前に、その源泉を個人的なメッセージとして明示しなければならない、と。

ポポーフの再評価はペレストロイカ期に始まった。1986年に日記の抜粋や文章を集めた著作集が出版され、現在までにロシアでいくつかの研究が現れている。ポポーフのアーカイヴはモスクワの国立グリンカ記念音楽文化博物館にある。小曲にも複数の異稿やスケッチが残され、ポポーフが思慮深く慎重に筆を進めるタイプの作曲家だったことがわかる。しかし《交響曲第1番》は自筆の総譜一点しか存在しない。それはソビエトの芸術政策に翻弄されたポポーフが、正当な評価を求めて未来に託した唯一の遺産なのだ。



ポポーフ《大ピアノ組曲》第1曲〈インヴェンション〉  
冒頭(原曲は1オクターブ上)



ショスタコーヴィチ《交響曲 第10番》  
冒頭(チェロとコントラバス)



D S(E<sub>b</sub>) C H  
ショスタコーヴィチの「イニシャル音型」